

ハイマート 〈故郷としてのアルプス〉を掘り崩す I

— ヘルマン・ブルガーの『人為の母』序論 —

新 本 史 斉

1 ヘルマン・ブルガー 『人為の母』

20世紀後半のスイス文学の保守性を、作家としても研究者としても厳しく批判してきたヘルマン・ブルガー(1942-1989)は、その2作目の長編小説『人為の母(Die Künstliche Mutter)』(1982)を、チューリヒにおける大学業界の虚実織り交ぜた叙述から始めている。

否、電で台無しになったこの5月第二週の母の日が過ぎても、すなわち氷の聖人たちとも言えようパンクラティウス、セルヴァティウス、ボンファティウス、そして冷たいゾフィーがその氷河をめぐるシンポジウムを執り行った日が過ぎても、私はなお、予定通りゲシェネンに入所することができないでいた。スイス応用技術の母なるスイス工科総合大学人文・軍事科学学部のスキヤングラスな学期会議のあと、まずはETUの恥辱が一掃されなくてはならないという話になり、そこで近現代ドイツ文学および氷河学——この人文系分野と自然科学系分野との結合は随意科目学部の古くからの伝統によるものである——を教える私講師ヴォルフラム・シェルコプフは、学部長ヴェルナーによる彼の講師契約の扼殺に対応しなければならなかったのである。

Nein: ich hatte in dieser zweiten Maiwoche nach dem verhagelten Muttertag, da die Eisheiligen Pancratius, Servatius, Bonifatius und insbesondere die Kalte Sophie ihr glaziales Symposium abhielten, noch nicht, wie vorgesehen,

nach Göschenen einrücken können, zuerst mußte, nach der skandalösen Semesterkonferenz der Abteilung für Geistes- und Militärwissenschaften der Eidgenössischen Technischen Universität, der Alma Mater Polytechnica Helvetiae, die ETU-Schmach getilgt werden, mußte Wolfram Schöllkopf, daselbst Privatdozent für neuere deutsche Literatur und Glaziologie – diese Verbindung eines humanistischen mit einem naturwissenschaftlichen Fach entspricht einer alten Tradition der Fakultativfächerfakultät –, auf die Erdrosselung seines Lehrauftrags durch Dekan Wörner reagieren. (Werke: 5/7) ¹

現実の「スイス工科大学」(ETH)が「スイス工科総合大学」(ETU)へ書き換えられ、併せて伝統的な「人文学部」が「人文・軍事科学学部」という奇妙な複合学部書き換えられていることは、単なる書割にとどまらぬ、この作品の核心に関わる設定と言わねばならないだろう。ここでブルガーは20世紀スイスにおいて機能している文学および人文科学の制度全体に、根底的な疑問を投げかけるべく、『人為の母』と題した虚構作品を対置しているのである。ブルガーがそこで批評しているものが何であるのかを知るためには、近現代スイスにおける文学的・人文学的言説と国家主義的・軍事的言説の特殊な絡み合いの歴史を簡単に振り返っておく必要があるだろう。

2 近現代スイスにおけるアルプス表象の変容〈1〉

——アルブレヒト・フォン・ハラール『アルプスの山々』

M・H・ニコルソンはその先駆的な山岳論『暗い山と栄光の山』において、17世紀までのヨーロッパでの山岳をめぐる言説が、基本的に西洋古典および聖書における文学的記述を色濃く反映したものとどまっていたこと、そこで山々は「均整をもった球」である地球につけられた「大地の顔の疣、あばた」といった否定的な言辭で叙述されていたこと、「大まかに言って1730年から1830年までの間に、各芸術が通過したピクチャレスクの局面は、いずれの場合にもロマン主義への序曲となった」こと、そしてこの時期に「芸術が理性ではなく想像力に訴えるようになった」ことを、広範な資料を引きつつ、明らかにしている²。この感性の転換期の最初期において、スイスの内側からアルプス山岳美を形象化した作品として、繰り返し参照されてきたのが、ベルン生まれの詩人アルブレヒト・フォン・ハラール (Albrecht von Haller, 1708-1777) による470行にわたる長大な詩『アルプスの山々 (Die Alpen)』

(1727/57)である。まずはその中から、もっとも「絵画的」といえよう連を引用しよう。

ここに険しい山があり峰々は壁のように聳え、
森を貫いて流れる水は滝から滝へほとぼしる。
泡立つ川の水は岩と岩の間をぬって走り下り、
激しく力強く岩壁の彼方をめざして空に跳ぶ。
滝壺に近づいて勢を増し、千条の糸となって、
灰色の飛沫が中空を乱れ舞いつつ虚空に漂う。
まるで水煙を切断するように一本の虹が懸り、
遠くの谷さえも絶える間のない露を吸るよう。
旅人が空を仰ぎ見るとき、頂上を流れる水が
雲間から出て雲間へ入るさまに驚嘆するのみ。

(宮下啓三訳、147頁)³

Hier zeigt ein steiler Berg die Mauer-gleichen Spitzen,
Ein Wald-Strom eilt hindurch und stürzt Fall auf Fall.
Der dick beschäumte Fluß dringt durch der Felsen Ritzen
Und schießt mit gäher Kraft weit über ihren Wall.
Das dünne Wasser theilt des tiefen Falles Eile,
In der verdickten Luft schwebt ein bewegtes Grau,
Ein Regenbogen strahlt durch die zerstäubten Theile
Und das entfernte Thal trinkt ein beständigs Thau
Ein Wanderer sieht erstaunt im Himmel Ströme fließen,
Die aus den Wolken fliehn und sich in Wolken gießen.

(Haller, *Die Alpen*. V.341-350)

「険しい山」、「森」、「滝」、空に懸る「虹」、「旅人」——18世紀世紀末から19世紀初めにかけて描かれるロマン派の画布上の風景を描写しているかにも思える詩行であるが、むろん順序は逆で、ハラー自身は1765年の版に書き添えた注釈のなかで、1729年に発表したこの詩は前年1728年のスイス旅行での体験に基づいて書かれたものであり、このくだりについてはベルン・アルプスのシュタウパッハの滝の叙述であることを、地元の人間の証言にも言及しつつ、強調している⁴。つまり、現実のアルプスを眼前にした経験に基づいて書かれたこの詩の方が、50年後、100年後の画家たちの主題選びに影響を与えている、とまずは言うべきなのである。事実、この詩を所収したハラーの詩集は、すでに彼の生前において11の版を重ね、さらに5つの外国語へも翻訳され、ドイツ語圏のみならず、ヨーロッパ中で愛読されることで、アルプス山岳美の表象を読者の眼差しに刷りこんでいったのである⁵。

しかしながら、現地に赴いたハラーの眼差しそのものも、決して眼前の事物そのものに開かれた、まっさらなものではなかった。というのも、そもそもこの詩を書くに際してのハラー関心は、別のものに向けられていたと読めるからである。単刀直入に『アルプスの山々』と題されたこの詩のなかで、先の引用箇所のように自然の情景そのものが描写されているかに読める詩行は、実のところ全体の5分の1にも満たないし、具体的な地名が言及されている箇所に至っては——ヨーロッパ、スイス、フランスといった広い領域を示すものを除けば——ゴットハルト(V.301)、シュレックホルン(V.422)、アーレ川(V.423)のたった3箇所にすぎないのである⁶。では自然描写以外の何か

らこの詩は構成されているのだろうか。そもそもの書き出しの数行に目を向けてみよう。

死ぬ定めの人間たちよ、境遇の改良に齟齬し、
自然の恵みと人工の技術を浪費してたまえ。
水を噴き出させて花園に生気を与えるがいい。
岩を切り割ってギリシャ流儀に並べるがいい。

(宮下訳、126頁)

Versucht, ihr Sterbliche, macht euren Zustand besser,
Braucht, was die Kunst erfand und die Natur euch gab;
Belebt die Blumen-Flur mit steigendem Gewässer,
Theilt nach Korinths Gesetz gehaune Felsen ab;

(Haller, *Die Alpen*. V.1-4)

『アルプスの山々』と題されたこの詩は、人工の技術を駆使して、生活環境を構成している文明に対する批判から始められている。この後、この文明批判は延々50行にわたって続き、その後でようやく、そうした「俗世からの防壁」として「構築された」ものとして、アルプスが名指されるのである。

自然が君らの固い土地を岩石で覆いはしたが、
君らの鋤と鍬が土を掘り起せば種が芽生える。
俗世からの防壁としてアルプスが構築された、
なにせ最大の災厄は人類自身が産むのだから。
湧き出る水が飲料、牛乳は最上最良の滋養物、
木の実さえも香味を添えて食事を楽しむ。
山々を深く穿つ坑道が君らに良質の鉄を恵む、
君らのような貧しさを羨む民もこの世にいる。
自由が支配する所なら労苦もまた堪え易い、
岩石にさえも花が宿り北風も威力を和らげる。

(宮下訳、129頁)

Zwar die Natur bedeckt dein hartes Land mit Steinen,
Allein dein Pflug geht durch, und deine Saat erinnt;
Sie warf die Alpen auf, dich von der Welt zu zäunen,
Weil sich die Menschen selbst die grösten Plagen sind;
Dein Trank ist reine Flut und Milch die reichsten Speisen,
Doch Lust und Hunger legt auch Eicheln Würze zu;
Der Berge tiefer Schacht giebt dir nur schwirrend Eisen,
Wie sehr wünscht Peru nicht, so arm zu sein als du!
Dann, wo die Freiheit herrscht, wird alle Mühe minder,
Die Felsen selbst beblümt und Boreas gelinder.

(Haller, *Die Alpen*. V.50-60)

人為による建築、噴水を批判するところから始まるこの詩の構成は、そのアルプス賛美が、基本的に否定性の上に成り立っていることを証言している。アルプスはそれそのものとして肯定されているのではない、「俗世」を否定することこそが、ここでの最大の関心事なのであって、それに対する「防壁」としてハラーはアルプスをまさに紙面上で言葉によって「構築」していると言ふべきなのである。それゆえ、ようやくアルプスそのものが登場する71行目以降の3つの連においても、実のところ、アルプスそのものに費やされる言葉は驚くほどに少ない。

ここには善を奴隷とし悪を貴族とするような
 滑稽な驕慢が生み出した差別の支配とてない。
 ここでは無用な不平不満で時間が浪費されず、
 労働が昼の時間を満たし、休息が夜を埋める。

[……]

ここでは学問が紙切れの宝を売ることがなく、
 ローマやアテネさながらの街路も作られない。
 学校で教える公式に理性を縛りつける人間も、
 太陽に対して運行の仕方を教える者もない。

[……]

ここでは運不運の浮沈が時代を塗り分けたり、
 悲哀の涙が束の間の喜びに続いたりもしない。
 人の生活は乱されない平安の裡に流れて行き、
 今日昨日に似て、明日は今日に似るだろう

(宮下訳、130-131 頁)

Hier herrscht kein Unterschied, den schlauer Stolz erfunden,
 Der Tugend unterthan und Laster edel macht;
 Kein müßiger Verdruß verlängert hier die Stunden,
 Die Arbeit füllt den Tag und Ruh besetzt die Nacht;

[……]

Zwar die Gelehrtheit feilscht hier nicht papierne Schätze,
 Man mißt die Straßen nicht zu Rom und zu Athen,
 Man bindet die Vernunft an keine Schulgesetze,
 Und niemand lehrt die Sonn in ihren Kreisen gehn.

[……]

Hier macht kein wechselnd Glück die Zeiten unterschieden,
 Die Thränen folgen nicht auf kurze Freudigkeit;
 Das Leben rinnt dahin in ungestörtem Frieden,
 Heut ist wie gestern war und morgen wird wie heut.

(Haller, *Die Alpen*. V.71-74, 81-84, 91-94)

いずれの連においても 1 行目に「ここ (hier)」という指示語が書きつけられているが、それは決して〈いま、ここ〉を言祝ぐために用いられているのではない。「～ない」「～されず」といった否定詞に確認できるように、このハラーの詩において、「ここ (hier)」は、明示的であれ暗示的であれ、常に「あそこ (dort)」との対照関係において、「あそこ」で為されていることが為されていない限りにおいて、肯定されているのである。こうした構成からの必然として、このアルプス賛美の詩は、眼前に展開する具体的自然ではなく、抽象的なレベルでの自然、そのうちに見出されうる道徳性を称賛し続ける。自然賛美の言説は、奇妙に抽象的な叙述にとどまり続けるのである。

幸いなる哉、不満のない民よ！ 悪徳の泉も
 華美贅沢も知らずにすむ幸運を感謝したまえ。

[……]

単純素朴さの続く限り無事息災も続くだろう。

(宮下訳、128-129 頁)

Wohl dir, vergnügtes Volk! o danke dem Gesckicke,
 Das dir der Laster Quell, den Ueberfluß, versagt;

[……]

So lang die Einfalt daurt, wird auch der Wohlstand währen.

(Haller, *Die Alpen*. V.41-42, 50)

こうした箇所からわかるように、感性の転換期に先駆けて書かれたハラーの詩は、実のところ、18 世紀に展開される「崇高」の美学には必ずしも向かっていない⁷。その影響するところとはともかくとして、この詩自体は理想のアルカディアならぬ、現実のアルプスに牧歌的風景が投影された色合いが強いものであり、むしろ 18 世紀において並行して見られる他のイデオロギー、

例えば、ヴィンケルマンの「単純素朴」なる古典古代の芸術、フランス啓蒙思想における「高貴なる野蛮人」に親和的なものなのである⁸。そして、一方で注釈において具体的な場所との連関を指示しつつ、他方であくまでも抽象的、象徴的なレベルにとどまり続けているがゆえにこそ、この詩における山岳美、山岳文化の称賛は、人々の旅行熱を煽るだけにとどまらず、その後のスイス文学におけるアルプス表象を駆動させる潜在力を宿しているのである。

恋い慕う視線が陽気な牧夫の胸に火を点すと、
すぐさま若い牧夫はその柔らかな光を感じる。

[……]

憧れはここで自惚れた虚飾に汚されはしない。
彼女への愛と彼への愛、二つ揃えば婚約締結。

[……]

結婚の床は純真であって見張り番は必要ない。
貞潔と理性とが見張り役をつとめるのだから。

[……]

ここでは秋が葡萄の実で丘を飾り立てもせず、
果実を潰して液をとり発酵させる習慣もない。
渇きを癒すために大地が人に贈るのは泉だけ。
私たちの死を早める人工の酸っぱい液はない。

[……]

寒さが増して被り物なしには外出しにくい頃、
人々の勤勉が牛乳からアルプスの主食を作る。

[……]

一家全員が精を出す。怠惰とは恥ずべきこと、
無為な怠惰ほど辛い奴隷仕事が他にあろうか。

(宮下訳、134-135、139-141頁)

So bald ein junger Hirt die sanfte Glut empfunden,

Die leicht ein schmachtend Aug in muntern Geistern schürt

[……]

Die Sehnsucht wird hier nicht mit eitler Pracht belästigt!

Er liebet sie, sie ihn, dies macht den Heirath-Schluß.

[……]

Hier bleibt das Ehbett rein; man dinget keine Hüter,

Weil Keuschheit und Vernunft darum zu Wache stehn;

[……]

Zwar hier bekränzt der Herbst die Hügel nicht mit Reben,

Man preßt kein gährend Naß gequetschten Beeren ab.

Die Erde hat zum Durst nur Brünnen hergegeben,

Und kein gekünstelt Saur beschleunigt unser Grab.

[……]

Indessen, daß der Frost sie nicht entblößt bertecke,

So macht des Volkes Fleiß aus Milch der Alpen Mehl.

[……]

Das ganze Haus greift an und schämt sich, leer zu stehen,

Kein Sklaven-Handwerk ist so schwer als Müßiggehen.

(Haller, *Die Alpen*. V.121-2、131-2、141-2、211-4、

231-2、239-240)

この高山の地において恋愛は虚飾に汚されることなく、結婚生活も嫉妬から解放されている。人々はワインではなく水を飲み、乳を飲む、この過剰さを欠いた地にあっては、人々は健康を害することもなく、遊惰に溺れることもなく、貞潔で理性的な存在であるかのようだ。つまり、この『アルプスの山々』において、もっとも詩行が割かれているのは、高山での生活における勤勉、堅実、秩序であり、そこから帰結する道徳上の美德なのである。

そうした叙述の延長上でハラールは、やがてスイスの地を踏まぬままにシラーが描き出すような、もっともスイス的なモチーフすらすでに書き込んで

いる。「今なおヨーロッパの半分の自由を縛っている／固い軛を大胆不敵にもテルが打ち砕いたとか、／スイスを取り囲む国々が欠乏と飢餓に苦しみ、／楽園を自称するフランスに物乞いが多いとか、／協調と誠実と勇気が硬く強く力の一つにして／小国スイスに幸福の翼を恵んでいるとか語る。」(宮下訳、144頁) 民間に伝わるテル伝説を引きつつ、ハラーは〈勤勉〉、〈美德〉に加え、〈自由〉をスイスに帰属させる。彼の詩において、アルプス、そしてそれを擁するスイスは、ヨーロッパの中心に見出されたアルカディアとして叙述されているのである。

3 近現代スイスにおけるアルプス表象の変容〈2〉

——ヨハンナ・シュピリ『ハイジの修行および遍歴時代』、『ハイジは学んだことを使うことができる』

こうして18世紀以降、広く共有されるようになった〈理想郷〉としてアルプスを、19世紀後半、比類ない形で〈故郷〉のイメージと結びつけることに貢献したのが、原作以上にそのさまざまな翻訳、翻案を通じて、英語圏で、さらには日本においても広く受容されてきた、ヨハンナ・シュピリの『ハイジの修行および遍歴時代 (*Heidis Lehr- und Wanderjahre*)』(1880)、そして『ハイジは学んだことを使うことができる (*Heidi kann brauchen, was sie gelernt hat.*)』(1881)の二部作である。(以下では併せて『ハイジ』と記述する)⁹

本論の文脈においてまず確認すべきは、児童文学ならではの圧倒的な感情移入を通じてアルプスの美を経験させるこの書物においても、アルプスの価値を核心において支えているのは、「ここ」と対比さるべき「あそこ」に他ならないことである。その際、シュピリはハラーにおける具象的かつ抽象的なアルプス叙述をさらに洗練させる。物語の主要舞台は、現実に地図上に存在する「マイエンフェルト」近郊の、「デルフリ」からさらに上った居住地「アルム」でありながら、村落共同体の住民が住む「小さな村」の彼方にある「高山の草地」でありえている。ドイツの商業都市「フランクフルト」から鉄道と馬車と徒歩で到達可能でありながら、それとくっきりと二項対立を成す牧歌的理想郷でもありえているのである¹⁰。

そしてさらにこの「理想郷アルム」と「大都市フランクフルト」の対比は、〈健康なハイジ〉と〈病弱なクララ〉、より正確に言えば、〈フランクフルトにおける病弱なクララと病んでいくハイジ〉と〈アルムにおける健康を取り戻すハイジと健康になるクララ〉という形で増幅される。ハラーの詩と同様に、眼

前のアルプスの風景美を叙述し続けてやまないこの作品もまた、そのアルプス単独では神話的影響力を獲得するまでの物語となることはできないのである。

もう一点、ハラーの詩同様、この小説においてもアルプスの理想郷は過酷な自然に囲まれていながらきわめて秩序正しい生活環境として叙述されていることも確認しておこう。

「お嬢ちゃんを座り慣れた椅子に座らせてあげられたら、その方がいいでしょう。旅行用のかご椅子はちょっとかたいですからね」とおじいさんは言いましたが、誰かが手を貸してくれるのを待つのではなく、病気のクララをすぐにかくましい両腕で、やさしく籐のかご椅子から持ち上げると、とても注意深く、やわらかい布を敷いた車椅子に座らせました。それからクララの膝の上の布をきちんと整え、両足がクッションの上に心地よく乗るようにしてやりましたが、その様子はまるで、おじいさんが一生のあいだ、手足の不自由な人たちの世話をしてきたかのようでした。[……] お客さんたちがモミの木の下にいるあいだにも、おじいさんは怠けてはいませんでした。小屋の前のベンチのそばに、いまではテーブルと、必要な椅子も出されていて、ここですてきなお昼ごはんが食べられるように、準備が整っていました。小屋のなかでは、これから食べるものが鍋のなかで湯気を上げたり、大きなフォークに刺されて火の上でとろとろに溶けたりしていました。[……] 小屋のなかではおばあさまがあちこち歩いて、すべての家具や設備をじっくり眺め、なにかもがきちんと片付き、整理されているのを見て、そのきちょうめんさを大いにおもしろがっていました。[……] おじいさんは「アルプスの空気がお嬢ちゃんに効くかどうかを見極めるのには、四週間がちょうどいいだろう。」と答えました。(『ハイジ』335-341 頁)

Der Öhi hatte derweilen den Rollstuhl herbeigerückt und einige der Tücher vom Reff heruntergenommen und hineingebettet. Jetzt trat er an den Tragsessel heran. »Wenn wir das Töchterchen nun in den gewohnten Stuhl setzten, so wäre es besser daran; der Reisesessel ist ein wenig hart«, sagte er, wartete aber nicht darauf, ob da jemand Hand anlegen werde, sondern hob sofort die kranke Klara mit seinen starken Armen sacht aus dem Strohsessel und setzte sie mit der größten Sorgfalt auf den weichen Sitz hin. Dann legte er die Tücher über

die Knie zurecht und bettete ihr die Füße so bequem auf die Polster, als hätte der Öhi sein Leben lang nichts getan, als Menschen mit kranken Gliedern gepflegt. [……] Während der Besuch unter den Tannen stattgefunden hatte, war der Großvater nicht müßig gewesen. Bei der Bank vor der Hütte standen jetzt der Tisch und die nötigen Stühle, und alles lag schon bereit, damit hier das schöne Mittagsmahl eingenommen werden konnte, das noch in der Hütte drinnen im Kessel dampfte und an der großen Gabel über den Gluten schmort. [……] Hier lief die Großmama hin und her und besah sich genau die ganze Einrichtung und hatte ihren großen Spaß an der ganzen Häuslichkeit, die so hübsch aufgeräumt und wohlgeordnet aussah. [……] meinte er, vier Wochen seien gerade recht, um beurteilen zu können, ob die Alpluft ihre Schuldigkeit an dem Töchterchen tue oder nicht. (Heidi: 182-187.)

高山療養ホテルのもろもろの業務、看護師、食堂係、調理師、技師、客室係それぞれか医師の仕事まで一人でこなしているかのような「おじいさん」の働きによって、クララはきっちり四週間の療養期間ののち歩行すらできるようになるのである。カトリン・ガイストはその山岳文学論において繰り返し、このアルムという場所がすきのない「文化空間」として構成されていることを強調している。クララがここで健康を取り戻すのも、そもそもハイジがここを我が家と感じるようになったのも、〈自然〉の侵食を決して許さないおじいさんのマルチタレントな労働ゆえのことなのである。その意味で、ガイストがこの作品で描かれる「アルム」の世界を、自分たち都市住民の願望を満たす形にアルプスを書き換える「植民地化」と批判的に意味づけているのも、過度な批判とはいえないだろう¹¹。最初にハイジがアルムの山小屋にやってきた日のこと、すぐ横の丸窓からアルプスの山々が見わたせる、とても良い匂いのする、けれどもけっしてちくちくすることのない干し草の寝床を少女に提供してみせるという、このうえなく洗練された配慮に、この作品の「おじいさん」に書きこまれたある側面は象徴されている。絶大な財力を背景に、大都市フランクフルトからやってきた療養客としてのクララを快癒させることなど、完璧なホテルマンとしても通用しよう「おじいさん」とっては造作もないことなのである。

しかし、本論の文脈においてこの作品が重要なのは、きわめてスイス的なモチーフを導入することによって、〈故郷としてのアルプス〉をドイツ語読者のみならず、翻訳を読む各国語の読者にまで刻印した点にある。

ゼーゼマンさんは立ち上がりました。ひどく気持ちを高ぶらせ、部屋のなかを行ったり来たりしてから、ようやく口を開きました。「夢遊病だって！病気なのか！ホームシック！わたしの屋敷にしながら、骨と皮にやせ細るだと！こんなことが屋敷で起こるなんて！そして、それを見ている者、気づいている者が誰もいなかったのか！そして先生、きみは、あんなに元気いっぱいフランクフルトに来たあの子を、みじめにやせ細った状態でおじいさんのところへ送り返せと言うのか？いいや、先生、そんなことはできないよ。わたしはそんなことはしない。けっしてできない。ぜひあの子の面倒を見てやってくれたまえ。きみがよしとする治療を受けさせて、元気にしてやってくれ。そうしたら、あの子が望むときに故郷に帰らせよう。だが、まずはきみが治療してくれ！」

「ゼーゼマンくん」と、先生は真剣に答えました。「きみがやろうとしていることを、よく考えてみたまえ！これは、薬で治せる病気じゃないんだ。あの子は頑健な体質ではないんだ。でも、あの子が慣れ親しんだ、力強い山の空気の中に戻してやれば、また完全に健康になれる。もし戻さなければ——あの子が不治の病になってしまったり、おじいさんにもう会えない体になってほしくはないだろう？」（『ハイジ』195頁）

Herr Sesemann war aufgestanden. In größter Aufregung lief er das Zimmer auf und ab; jetzt brach er auf: »Mondsüchtig! Krank! Heimweh! Abgemagert in meinem Hause, das alles in meinem Hause! Und niemand sieht zu und weiß etwas davon! Und du, Doktor, du meinst, das Kind, das frisch und gesund in mein Haus gekommen ist, schicke ich elend und abgemagert seinem Großvater zurück? Nein, Doktor, das kannst du nicht verlangen, das tu ich nicht, das werde ich nie tun. Jetzt nimm das Kind in die Hand, mach Kuren mit ihm, mach, was du willst, aber mach es mir heil und gesund, dann will ich es heimschicken, wenn es will; aber erst hilf du!« »Sesemann«, entgegnete der Doktor ernsthaft, »bedenke, was du tust! Dieser Zustand ist keine Krankheit, die man mit Pulvern und Pillen heilt. Das Kind hat eine zähe Natur, indessen wenn du es jetzt gleich wieder in die kräftige Bergluft hinaufschickst, an die es gewöhnt ist, so kann es wieder völlig gesunden; wenn nicht – du willst doch nicht, dass das Kind dem Großvater unheilbar oder gar nicht mehr zurückkomme?« (Heidi: 106)

ここで描かれているハイジの病が、「ハイムヴェー (Heimweh)」であり、こ

れが具体的に故郷を離れて遠いヨーロッパ諸国の宮廷で「傭兵」として勤務するスイス兵特有の病として広く認知される中で、フランス語「アムヴェ」、英語「ホームシック (Homesick)」という語を生み出していった歴史については、様々な文献において詳述されているとおりである¹²。この作品において、アルプスの美とその化身のごとき純真無垢なハイジに触れることで、愛娘を亡くし悲嘆の底に沈むクラウセン氏は生への希望を見出し、病弱なクララは自分の足で歩み始めることになる。

アルプスを都市の人間が心身を回復する空間として描くこの小説が、すでにスイスにおいて本格的に展開し始めていたアルプス観光そしてサナトリウム保養と親和的であることは言うまでもないだろう。しかし、それ以上に重要なのは、この文学作品によって〈美しいアルプス〉イメージに〈故郷としてのアルプス〉イメージがさらに書き加えられたことだろう。すでに母を亡くした存在として登場するハイジは、一度、美しいアルプスから引き離されることによって、故郷としてのアルプスを発見する。そこに戻ってきて母の乳ならぬ山羊の乳を飲むことでふたたび健康に、自分自身に戻るのである。

4 近現代スイスにおけるアルプス表象の変容 (3)

——「精神的国土防衛」における文化的、軍事的要塞としてのアルプス

もう一点、ヘルマン・ブルガーの長編小説『人為の母』の背景をなす文化的表象としてのアルプスを論じる本稿において、触れておかねばならないのが、20世紀前半の戦間期にスイスが経験した、政治的、文化的イデオロギーとしての「精神的国土防衛 (Geistige Landesverteidigung)」である。

隣国ドイツでの1933年のナチスによる政権奪取以降、ドイツ語圏を有する小国スイスにおいては、外交、経済、難民政策等さまざまな分野にわたり、「順応」から「抵抗」に至るまで様々な意見が噴出し続けた。そのなかで前面に迫り出してきたキーワードが、国境外部からおとずれる脅威に対し「スイス的」なものを文化レベルで保守することを主張する「精神的国土防衛」である¹³。しかし、この抽象概念を使うに際して、何を「スイス的」とみるかは論者によってさまざまであった。その錯綜した議論を整理している葉柳和則によれば、百出する議論の中で少なくとも大枠として共通して見られたのは「共産主義」と「ナチズム」の排除という論点であり、その意味でこの標語のもと戦間期のスイスでは「全体主義に抗する全体主義」という逆説が生きられて

いたことが、確認できるという¹⁴。

本稿の文脈で押さえておきたいのは、さらに危機が差し迫った状況において国家としてのスイスが選択した軍事的戦略が、まさに文字通り「精神的国土防衛」の刻印を帯びていたことである。1938年以降、オーストリア、チェコスロバキア等隣接諸国へのナチス・ドイツの侵攻が続いてゆく中で、スイス両院合同会議は1939年8月、平和時には空席となっているスイス軍総司令官にアンリ・ギザンを選出し、ギザン將軍は1940年7月に13世紀末に原初三州が盟約を結んだとされるスイス建国神話の地、リュトリの草原で外敵に対する徹底抗戦を宣言し、いわゆる「レデュイ防衛計画」を発表する。アルプス地域にスイス軍を集結させ、山岳を天然の要塞とすることで徹底抗戦しようという国家防衛計画である。これは易々と侵入を許したベルギー、オランダなどとは異なりスイス侵攻には多大な労力とエネルギーを必要とすることをナチス・ドイツに知らしめるための心理作戦としての性格も有していた。さらにはアルプスを越えるゴットハルト峠とシンプロン峠を押さえ、ドイツ・イタリアの枢軸国間の南北交通路を断つという点で、一定の戦略的合理性も備えていた。(実際、様々な要因からナチスはスイスに侵攻することはなかった。)とはいえ、経済活動、社会活動の場である都市部の防衛を断念して山岳を死守しようとするこの作戦に、どれほどの現実性があったのかはやはり疑問が残るのだが、ここではまさにこれが現実性だけでは測ることのできない「精神的」国防計画であった点に注目したい。つまりは、アルプスを死守することこそが国家を死守することと同一視されえたことの、文化的リアリティである。

この点に関して葉柳は、先述した研究において興味深い資料に着目している。1938年12月9日付の「連邦内閣から連邦議会への、スイス文化の保護・振興の組織と課題に関する教書 (Botschaft des Bundesrates an die Bundesversammlung über die Organisation und die Aufgaben der Schweizerischen Kulturwahrung und Kulturwerbung)」である。

スイスの国家思想は人種から生まれたものでも、肉体から生まれたものでもなく、精神から生まれたものである。土地を分ける山であり、結びつける峠でもあるゴットハルトの周辺地域で、ひとつの並はずれて偉大な理念の受肉、つまり国家の誕生を祝うことができたというのは、なんとすばらしく記念すべきことだろうか。その偉大な理念とは、ヨーロッパ的かつ普遍的な理念、すなわち、諸民族と西洋諸文化による精神的共

同体という理念である。(『文化教書』999)¹⁵

Der schweizerische Staatsgedanke ist nicht aus der Rasse, nicht aus dem Fleisch, er ist aus dem Geist geboren. Es ist doch etwas Grossartiges, etwas Monumentales, dass um den Gotthard, den Berg der Scheidung und den Pass der Verbindung, eine gewaltig grosse Idee ihre Menschwerdung, ihre Staatwerdung feiern durfte, eine europäische, eine universelle Idee: die I d e e einer geistigen Gemeinschaft der Völker und der abendländischen Kulturen!¹⁶

葉柳が指摘するように、4つの国語を持ち、多数の歴史的に自立性の強いカントンから構成されるスイスは、「肉体」すなわち（スイスが抗していたナチスの観点からすれば）「人種」ではなく、「精神」すなわちカントン間の「盟約」、つまりは「意志」にそのアイデンティティを求める「意志による国民（Willensnation）」なのであり、分水嶺であるとともに言語を分断する峰でもあるアルプス、とりわけその中の峠＝結びつける場所、ゴットハルトこそがナショナル・アイデンティティにとって聖なる場所であることがここでは謳われている¹⁷。いわばフィヒテ的な意味でアイデンティティを保証してくれる「内的国境」を持たないスイスにとって、アルプスそしてゴットハルト峠は、多様でありながら一つであることを象徴するナショナルな聖地なのである¹⁸。

5 母なるアルプスを下から、内側から掘り崩す —— ふたたび、ヘルマン・ブルガー『人為の母』

ここまで概観してきた、過去3世紀にわたるアルプスの岩塊に付与されてきた文化的表象の変容をふまえた時にはじめて、私たちは20世紀後半スイス文学の異端児ともいえようヘルマン・ブルガーの長編小説『人為の母』（1982）を読み解く出発点に立つことができるだろう。本稿冒頭で引用した箇所には以下のような叙述が続く。

第8学科の軍事学専攻は、スイス軍のレデュイ防衛構想の地形的構成要素としての氷河が、この国の直近の文学によって横領され、そのことによって地質学的かつ戦略的状況がいわば外国へ、すなわち敵側へ漏れたことをこころよく思っていなかった。以下の文章は軍事史研究者シェー

デリンによるものである——「氷河は我々の山岳歩兵隊である、もしロシアがスイスほどの氷を擁していたなら、ヒトラーは侵攻をためらったことだろう。」

ヴォルフラム・シェルコプフはその間、その就任講義において、1960年代ジュラ山地南麓にぬくぬくと居を構えた近現代スイス文学において、アルプスの凍りついた積氷前線を下から溶かそうとする傾向がみられることを示唆したのだが、これはむろん、軍事研究者らのあいだで話題とされることとなった。この破壊的文士たちは、と言われたことだろうが、社会組織のみならず、聖なるものにまで手をつけようとしている、すなわち、我らの愛する神が——周知のように、それにちなんで中央アルプス山脈の中心たるゴットハルトは名づけられたのであるが——御みずから天と地を造られるに際して、来るべき盟約者団のために、特別に、極秘に、親密にとっておいた自然防衛諸力に手をつけようとしているのである。これこそが急襲作戦さながらに行われたヴォルフラム・シェルコプフの講師資格剥奪の理由であった。[……] 実際のところ、ゴットハルト峠におけるレデュイ砦と、チューリヒ市のかつての要塞跡地の武器庫の上にある、幾重にも防御を固めた「ゼンパー＝グルシェン」大学行き止まり駅の間にはきわめて興味深い並行関係があった。ここでは硬い巖にまったく歯が立たず、あちらでも全く歯が立たないことが予想された。ここには見通し難い講義室、収集室、製図室、半円筒型地下室、資材地下置場、配送業者入口、大学評議室、採光大食堂演壇、日除け歩廊、柱廊バルコニー等々から構成される迷宮があり、あちらには、療養坑道病院の存在をめぐる世の噂を信じてよいとしての話であるが、劣らず混乱、錯綜した監獄システムがある。すなわち、聖ゴーデハルデはいわば——とりわけ地理学、水文学、氷河学を考慮に入れた——自然と化したチューリヒ工科総合大学なのであり、翻って州教員ポストは工業専門分野へ展開を遂げた山塊であった。そしてゲシェネンの地と同じく、ここでも支配しているのは、永遠なる精神の薄明であった[……]。

Die militärwissenschaftliche Hälfte der Abteilung XIII sah es ungern, daß die Gletscher als topographische Bestandteile des Réduit-Verteidigungskonzeptes der Schweizer Armee von der jüngsten Literatur dieses Landes vereinnahmt und damit in ihrer erdgeschichtlich-strategischen Lage quasi ans Ausland, also an den Feind verraten wurden. Vom Milizhistoriographen Schädelin stammte

der Satz: »Die Gletscher sind unsere Gebirgsinfanterie. Hätte Rußland über ebensoviel Eis verfügt wie die Schweiz, Hitler hätte den Einmarsch nicht gewagt.«

Wolfram Schöllkopf indessen hatte in seiner Antrittsvorlesung darauf hingewiesen, daß sich in der neueren Schweizer literatur, welche sich in den sechziger Jahren behaglich am Jurasüdfuß eingerichtet habe, eine Tendenz abzeichne, die erstarrten Packeisfronten in den Alpen von unten her zu schmelzen, und das hatte sich natürlich unter den Militärwissenschaftlern herumgesprochen. Diese subversiven Literaten, so mochte es geheißen haben, unterwühlen nicht nur das Gesellschaftssystem, sondern rühren ans Heiligste: an die Naturabwehrkräfte, die Seine Eminenz, der Liebe Gott persönlich, nach dem ja das Zentrum unseres Zentralalpenmassivs, der Gotthard, benannt ist, anläßlich der Erschaffung von Himmel und Erde für die künftige Eidgenossenschaft reserviert hat, exklusiv, streng geheim und vertraulich. Das war der Grund für die handstreichartige Rückeroberung von Wolfram Schöllkopfs Lehrauftragsstellung. [……] Es gab ja in der Tat hochinteressante Parallelen zwischen dem Fort Réduit im Gotthard und dem über und über rustizierten Semper-Gullschen Hochschulsackbahnhof, der auf einer Schanze des ehemaligen Festungsareals der Stadt Zürich thronte: hier biß man auf Granit, dort würde man auf Granit beißen; hienieden ein undurchschaubares Labyrinth von Auditorien, Sammlungen, Zeichensälen, Stichtonnengewölben, Materialkatakomben, Lieferanteneingängen, Senatzimmern, Lichthofkanzeln, Blendarkaden, Säulen-Balustraden – dort, wenn man dem Gerücht über die Existenz einer Heilstollenklinik Glauben schenken durfte, ein nicht minder verwirrendes Carceri-System: der heilige Godehard war sozusagen die Natur gewordene ETU unter besonderer Berücksichtigung der Abteilung für Geologie, Hydrologie und Glaziologie, umgekehrt die Landeslehrstätte ein zum Polytechnikum aufgefächertes Gebirgsmassiv; in Göschenen wie hier herrschte permanente Geistesdämmerung [……]. (Werke: 5/9f.)

ここで暗示されているのが、前節で述べたように1930年代後半以降、スイスの文化的イデオロギーの中核を成してきた「精神的国土防衛」であることはもはや明らかだろう。軍事的国土防衛、経済的国土防衛とともに精神的国土防衛が、スイスの国土防衛の三つの柱を成していた戦前の状況と、戦後ス

イスにおける公式人文科学の制度が連続性を持っているとの認識を前提に、ブルガーは作品冒頭でこうした虚構を設定しているのである。そして、このアカデミズムの組織から放逐された、「ドイツ文学+氷河学」を専門分野とする主人公ヴォルフラム・シェルコプフには、組織の精神性の固陋さを批評し解体を試みるという課題が課されることとなるだろう。

しかし、ブルガーのこの小説の過激さは、実のところ、アカデミズム批判、ナショナル・イデオロギー批判の舌鋒の鋭さにあるのではない。むしろこれは、はるかに困難な課題の呼び水なのであって、主人公シェルコプフは自身自身の〈母をめぐる病〉と向かい合うべく——みずからの下意識に潜入するように——アルプス山岳地下坑内の病院における「人為の母」と呼ばれる未知の治療法に向かうのである。ブルガーはここで、国家レベルでの母(=神話化された母ヘルベチア)と個人レベルでの母、両者の解体を試みようとする。その詳細については、稿をあらためなければならないが、その母なるもの解体の方法論にかかわる文章をあらかじめ二つほど引用しておこう。まずは最初の長編小説『シルテン(Schilten)』(1976)からの引用である。

わたしの言語引き剥がし療法は、実際のところ基本的に意味論上のショック・セラピーから成るものである。いくつかの単語を、それが意味を失ってしまうまで綴り続けてみる。100回「^{B-r-u-n-n-e-n}い-ず-み」と書いてみる、それから質問する、どうして「^{B-r-i-n-n-e-n}いじみ」ではいけないのかと。記号と指示されるものとの関係が恣意的で、まったく任意の関係であることを理解してはじめて、人はまったく思うがままのことを言葉で表現できるのである。私たちはこの訓練を「脱名すること」と呼んでいる。すべてを脱名して、それから新たに命名すること、これが言語-教育なのである。

Meine Sprach-Entziehungskur besteht denn auch im wesentlichen in einer semantischen Shock-Therapie. Wir buchstabieren die Wörter so lange vor uns hin, bis sie ihren Sinn verlieren. Hundertmal B-r-u-n-n-e-n, dann die Frage: warum nicht Brinnen? Erst wenn man begriffen hat, daß die Beziehung zwischen dem Zeichen und dem Bezeichneten eine willkürliche, absolut beliebige ist, kann man auch etwas absolut Beliebiges mit den Wörtern ausdrücken. Entnamsen nennen wir diese Übung. Alles entnamsen und dann neu benamsen, das ist Sprach-Erziehung. (Werke: 4/228)

きわめて危険な行為と言わざるをえないだろう。このような「言語（引き剥がし）教育（Spracher [ent] ziehung）」は、人を母語から解放すると同時に、母語からも放逐しかねない。その先では、「意味が深淵から深淵へと転落し、ついには言語の底なしの深みへ失われ」てしまいかねないのである¹⁹。しかし、ブルガーは読み手の側のそのような危惧をよそに、そうした訓練の結果、生じうる人間の姿をも、あるエッセイの中でスケッチしている。

言葉だけからできている男を言葉で描くのは、言葉を言葉で描くと同じで容易なことではない。そして、言葉で描くことができないものはすべて、人を不安にさせるものなのである。にっこり笑うとき、怒りに身を震わせるとき、たしかに男はわたしにうりふたつだ。けれど全体としてみると、いかなる人間にも似てはいない。『人間』という言葉にすら似てはいない。似ているとすればせいぜい、『言葉』という言葉だろうか。男のまわっている服は形容詞、名詞、動詞の継ぎ接ぎ細工。アルミ箔のようにキラキラ光っている。

Der Mann, der nur aus Wörtern besteht, ist so schwer zu beschreiben wie Wörter, und alles, was schwer zu beschreiben ist, macht uns Angst. Wenn er lächelt, gleicht er mir, wenn er wütend ist ebenfalls, aber als Ganzes sieht er keinem menschlichen Wesen ähnlich, nicht einmal dem Wort Mensch, am ehesten dem Wort Wort. Sein Gewand ist zusammengeflochten aus Adjektiven, Substantiven und Verben. Es glitzert wie Stanniol. (Werke: 7/235)

書き手ブルガーは長編小説『人為の母』で、スイスにおいて過去数世紀かけて言説化されてきた〈故郷としてのアルプス〉をその形式において解体しようとする。その際に叙述される、アルプス下部の坑内病院に潜入する主人公の道行きは、ブルガー自身が敢行しようとする言語（引き剥がし）療法、小説的自己解体をも意味することになるだろう。

数々の小説と並行して、ヴィトゲンシュタインの『論理哲学論考』をもじった著作『論理自死論考——自殺について (Tractatus logico-suicidalis, Über die Selbsttötung)』（1988）を上梓した翌年、ブルガーは自らの命をも絶ってしまう。以来30年余を経て作品集も刊行された現在、ブルガーの言語実験は翻訳と多言語性を内包したスイス文学の可能性として、あらためて読み直されて良いのではないかと思う。

本論文は、科研費 19H01251 の支援を受けて作成した。

(This work was supported by JSPS KAKENHI

Grant Number 19H01251)

注

- 1 Burger, Hermann: *Die Künstliche Mutter. Roman*. Werke in Acht Bänden. Fünfter Band. Hg. von Simon Zumsteg, München 2014, S. 7. 以下、本作品集からの引用は (Werke: 5/7) の形で巻数と頁数を表記する。
- 2 M・H・ニコルソン『暗い山と栄光の山』国書刊行会、1994年、61-108頁。
- 3 ハラーの原文は、Haller, Albrecht von: *Die Alpen. Versuch Schweizerischer Gedichte*. Nach der Ausgabe letzter Hand. Hofenberg 1765/ Berlin 2017, S. 1-43. から引用し、詩の行数を (Haller, *Die Alpen*. V. ...) の形で表記する。日本語については宮下啓三訳を用いる (『スイス詩集』スイス文学研究会編、早稲田大学出版部、1980年、126-155頁)。宮下訳は見ての通り、原文における詩型を、漢詩を連想させつつ、各行の字数を揃える形へ変換している。
- 4 Haller, Albrecht von: *Die Alpen*. S. 17-43.
- 5 ドイツ語文学における山岳表象を論じた、カトリン・ガイストはさまざまな資料から例を引きつつ、「ハラーによるアルプスの叙述は、芸術史、文学史において確固としたトポスを形成した」ことを確言している。Geist, Kathrin: *Berg-Sehn-Sucht. Der Alpenraum in der deutschsprachigen Literatur*. Paderborn 2018, S. 63.
- 6 その一方で、詩集が版を重ね、読者層が広がり、ヨーロッパにおけるアルプス熱のなかで参照される度合いが高まるにつれ、ハラーは前書きと注釈という、テキスト外の記述を通じて、詩篇中の叙述のモデルが具体的にどの場所であるのかを、固有名を添えて解説していくというテキスト戦略をとるようになる。このことにより、ハラーの詩はアルプス描写としての正統性を増してゆき、並行して、アルプス旅行について報告する書き手は、いっそうハラーの詩について言及するようになった。「旅行記」というジャンルの成立・展開との関係においても、ハラーのテキスト戦略は非常に興味深いものといえるだろう。Raymond, Petra: *Von der Landschaft im Kopf zur Landschaft aus Sprache. Die Romantisierung der Alpen in den Reiseschilderungen und Literarisierung des Gebirges in der Erzählprosa der Goethezeit*. Tübingen 1993, S. 12. 参照。
- 7 18世紀に展開する「崇高」の美学については、星野太『崇高の修辞学』月曜社、2017年、131-182頁を参照されたい。
- 8 ヴィンケルマンの古典古代芸術の評価については、Uhlig, Ludwig (Hg.): *Griechenland als Ideal. Winckelmann und seine Rezeption in Deutschland*. Tübingen 1988, S. 22-37. 「高貴なる野蛮人」については、例えば、多木浩二『ヨーロッパ人の描いた世界』岩波書店、1991年、176-178頁を参照されたい。

- 9 以下、本書からの引用は、Spyri, Johanna: *Heidis Lehr- und Wanderjahre/ Heidi kann brauchen, was sie gelernt hat*: beide Bände in einem Buch. Hofenberg 2015. に拠り、括弧内に (Heidi:**) の形で本文中に記す。日本語訳は『アルプスの少女ハイジ』松永美穂訳、角川文庫、2021年を用い、括弧内に (『ハイジ』**頁) の形で頁数を記す。
なお、英語圏、日本でのハイジ続編の氾濫については、Wissmer, Jean-Michel: *Heidi. Ein schweizer Mythos erobert die Welt*. Basel 2014, S. 111-132. (ヴイスマール『ハイジ神話』川島隆訳、晃洋書房、2015年、141-168頁) を参照されたい。
- 10 カトリン・ガイストは作品冒頭での、「デルフリ」から「アルム」に登るハイジが重ね着をした服を一枚一枚脱ぎ捨てる場面を、主人公の文化的慣習からの解放を象徴する、通過儀礼のシーンとみなしている。
- 11 Geist: *Berg-Sehn-Sucht*, S. 485.
- 12 もっとも詳細な文献の一つが、この語の概念史を論じた Kluge, Friedrich: *Heimweh. Ein Wortgeschichtlicher Versuch*. Freiburg i.Br. 1901/2018, S. 1-50. である。『ハイジ』の神話的影響力については、Wissmer, S. 77-79. (ヴイスマール『ハイジ神話』、90-92頁)、および、森田安一『ハイジが見たヨーロッパ』河出書房新社、2019年、118-133頁を参照されたい。また、近現代スイス文学における「ハイムヴェー」モチーフの扱われ方については、宮下啓三「ホームシックとスイス人」、森田安一編『帰路に立つスイス』、87-112頁が概観している。併せて参照されたい。
- 13 このような抽象的なスローガンが出てこざるをえない背景として、独、仏、伊、ロマンシュの4つの言語圏、プロテスタント、カトリックおよび両者の混在地域を抱え、歴史的にも自立性の高いカントンの盟約関係から形成されてきた連邦国家スイスには、戦時のナショナリズムにおいてすら国家的一体性、国民的同一性を根拠づけるために動員しうるリソースがきわめて乏しい、という事情がある。
- 14 葉柳和則編『ナチスと闘った劇場 精神的国土防衛とチューリヒ劇場の「伝説」』春風社、2021年、41-45頁。
- 15 葉柳、前掲書、46頁参照。
- 16 Botschaft des Bundesrates an die Bundesversammlung über die Organisation und die Aufgaben der schweizerischen Kulturwahrung und Kulturwerbung. (Vom 9. Dezember 1938.) https://www.fedlex.admin.ch/eli/fga/1938/2_985_/de. (アクセス日：2021年9月29日)
- 17 本論との関連において、こうした文化教書に「文学作品の相互翻訳プロジェクト」、「チューリヒ工科大学の一般教養過程におけるスイス史とスイス伝統文化関連講義の充実等、多様な文化政策」が掲げられていること、「スイス作家同盟」が「総動員型の文化運動である精神的国土防衛の一翼を担うコーポラティズムの職能団体へ変容していた」こと、さらには「戦後においても、精神的国土防衛はスイスの文化政策を規定し続けた」ことを、葉柳が指摘している点も触れておきたい。葉柳、前掲書、37-41頁参照。

- 18 E・ルナン、J・G・フィヒテ他『国民とは何か』インスクリプト、1997年、149-150頁。
- 19 W・ベンヤミン「翻訳者の使命」、『ベンヤミン・コレクション2 エッセイの思想』浅井健二郎編訳、ちくま学芸文庫、1996年、410頁。